

創生デザイン学科の研究の特徴と今後の研究動向

日大生産工 ○田中 遵

1 まえがき

平成21年に創生デザイン学科が開設されてから4年目になります。様々な分野からデザイン関連の研究や仕事をされてきた先生が集まりアートとテクノロジーの融合という“やわらかい工学”を提唱して学生の育成をしてきました。

本報告では、私の研究と教育の視点より、創生デザイン学科の学生達が授業で学んだ知識を活かして創造してきた作品について報告いたします。

2 ゼミナールの授業

近年、こどもの頃にノコギリなどの刃物を使用して物を作る経験をしたことがない学生が増えています。私のゼミナールでは実際の材料に触れてもらい、そして材料に合う道具を教え、小さくてもシンプルでもよいので本物を作ることを経験させます。図1は、学生が木材でカラトリーを制作した写真です。用意した木材、カリン（東南アジア）、パドック（アフリカ）、コクタン（インド）、ゼブラウッド（アフリカ）、キングウッド（アマゾン）などから各自が色や材質から選んで制作しました。木材は種類によって硬さが違うので使用する手持ち工具、電動工具、仕上げのヤスリも違う物が必要になります。

また、図2はイスの制作ですが、雑誌の写真を見ながら図面を起こし、そしてパイン材（北米）を使用して実制作をしました。ルーターというアリ溝掘り用の電動工具を使用すれば簡単に制作できてしまいますが、今回はノコギリやノミなど手持ち工具を使用して物づくりの難しさを経験してもらっています。

図3は、制作した原寸の作品を使用してインテリア空間やそこに置かれる製品を色合いなど調和良くレイアウトする練習をしているものです。



図1 学生作品、カリンで制作したカラトリー



図2 学生作品、パイン材で制作したイス



図3 制作した原寸の作品にてインテリア空間を想定してレイアウトの練習

3 デザインコンペティションへの応募

創生デザイン学科では、デザイナー、コンセプターの育成を行っております。デザイナーは、新しい作品を創造し、そしてその作品を社会に認めてもらわないと仕事になりません。その訓練として、学外のデザインコンペティションに応募します。図4は、3年生(進藤篤)が創造した照明装置が付随したイスの提案です。この作品は、東京・六本木の国立新美術館で9月に開催された第76回新制作展スペースデザイン部に応募し入選した作品です。また、作品を作ると同時に、就職活動に使用するポートフォリオの制作を課していません。デザイナーとして使用方法を知っておくべきフォトショップとイラストレーターを活用し、人を引きつけるプレゼンテーションを学びポートフォリオを制作しています。

4 デザイン展への出展

大学では、1人で創作する演習・設計課題が多くなります。しかし、社会では多くの意見の違う人々と一緒に仕事を進めていかなければなりません。本年度は、デザインに興味ある40人の学生が、学科、学年、研究室を超えてTOKYO DESIGNERS WEEK 2012(明治神宮外苑絵画館前, 10/30~11/5)に作品を出展しました。本年度の展覧会の主旨は、「HELLO DESIGN!」をスローガンに、大人から子供まで幅広い層に、より身近にデザインに触れ、感じ、楽しみ、刺激を受けてもらうイベントとして展開しています。最初の段階では創生デザイン学科の教室を改造した工房で作品を制作していました。しかし、作品はコンテナ展示のため幅2,350×奥5,900×高2,390mmと大きく場所が足りなくなり、39号館の未来工房を借りて最後の仕上げを行い会場に搬入することができました。

5 まとめ

私の研究の一つに、子ども環境や子どもが無意識に楽しさを感じる玩具・遊具などの研究があります。木材加工、鉄材溶接、樹脂成型など様々な材質と加工方法で作品を制作するとともに論文にまとめて発表しています。

図7は、東日本大震災のチャリティー作品として、小さなおにぎり型のジグソーパズルを制作したものです。ワーカブルにて原型を作り、そしてエポキシ樹脂を流し込むための型をシリコンで作って真空脱泡をして完成品を作ります。またエポキシ樹脂には着色料や貝殻などを封入し形にアクセントを与えます。

学生達には様々な制作手法や技術を伝えていますが、これからはもっと39号館未来工房を自由に使って、デザイナーとして通用する知識や技術を習得してもらいたいと考えます。



図4 学生のデザインコンペ入選作品、光るイスの習作

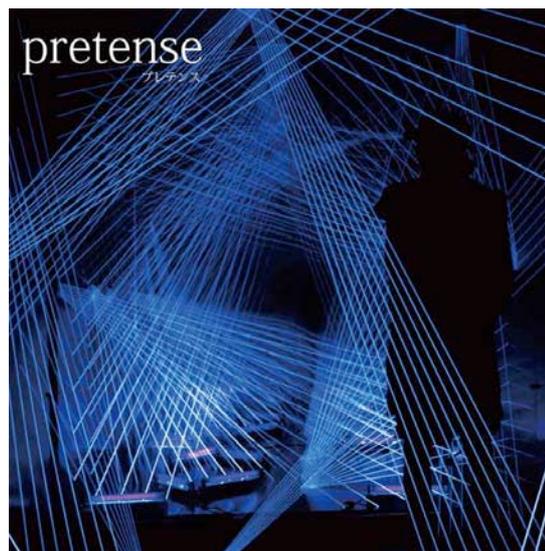


図5 デザイン展への出展作品



図6 デザイン展への出展作品の制作風景 (39号館未来工房にて)



図7 東日本大震災チャリティー作品 (田中遵 作)